■ 研究論文

明末清初以前の中国庭園における太湖石について

The Taihu Rocks in Chinese Gardens before the 17th Century

外村 中*

Ataru SOTOMURA

摘要：太湖石は、今日の中国庭園を最も特色付けている些か奇怪にも見える石のことである。本稿は、太湖石が今日のように利用されるようになったのは、比較的時代が浅いことを指摘し、今日の太湖石の庭園のみをもって中国の古庭園を検討することは、必ずしも適切ではないと考えられるわけを示す。

はじめに

中国の庭園と云えば、ほとんど誰しもが奇怪な形態をした庭石が置かれているのを想像するだろう。そして、そのような庭石の最も代表的なものが太湖石であるということは、造園の専門家にとっては、すでに周知のことであろう¹⁾。言い換えれば、太湖石の庭園こそ今日の中国庭園であるといっても言い過ぎではない。

ところで、太湖石により複雑に構成された今日の中国庭園は、今日我々が普通に考えるところの日本庭園とその様式を明らかに異にしている。どうもこのためか、日本庭園における中国の庭園の直接の影響は、あまり検討されていないのが事実のようである²⁾。特に石を用いてつくられた日本庭園の代表的様式である枯山水の成立に関しての論考を見るに、中国の山水画の影響に関しては語られるのに、なぜか、同時代あるいは先行する時代の中国庭園との直接の比較検討はほとんどなされていない感がある。日本において枯山水が成立した当時、すなわち十三世紀から十四世紀にかけて、あるいは、それ以前の中国の庭園が、今日の中国庭園と同様な様式を持つものであったことが証明されれば問題はない。そうなれば、枯山水を語る時、中国庭園の直接の影響を検討する必要もないだろう。

しかしながら、万が一、中国の太湖石の庭園が、今日我々が目にする事ができる中国庭園と様式を異にしていたらどうであろうか。あるいは、中国の庭園は、かつて今日の日本庭園のような様式をもっていたかもしれない³⁾。

実際、今日中国に残る太湖石の庭園遺構は、ほとんどすべて、後世特に近年の大幅な改修を受けている。また、古くてもせいぜい明代(1368-1661)末頃の様式を伝えるものが、ほんのわずか部分的に残るに過ぎないようである。したがって、太湖石の庭園が、明末清

初(十七世紀頃)以前において、どのようなものであったのかは、必ずしも明らかではないのである。

ちなみに、比較的古い様式を部分的に伝えられると考えられる庭園遺構としては、清初(康熙年間: 1662-1722)のものとして、蘇州の耦園、無錫の寄暢園、また、明末(萬曆: 1573-1620)のものとして、上海の豫園、嘉定の秋霞園などが、わずかにあげられる程度である⁴⁾。

そこで、本稿では、太湖石が、かつて特に明末清初以前において如何に愛好され庭園に用いられていたかを概観し、中国の庭園はかつてはどのようなものであったのかを検討してみたい。

本稿は、次のように構成する。

1. 太湖石に関する代表文献資料名をあげる。
2. 太湖石とは如何なる石かを説く文献資料の内容を検討する。
3. 太湖石の産地について検討する。
4. 太湖石の何処に魅力があったのかを検討する。
5. 太湖石の流行の始まりについて検討する。
6. 史上最も有名な艮嶽の太湖石について検討する。
7. 太湖石が、実際、如何に流行したかを確認する。
8. 結論。

ところで、本稿では、浅学にもかかわらず、敢えて出来る限り多くの資料の訳出を試みた。その方が、中国における太湖石愛好の状況をより詳細に理解できると考えたからである。不適切なところもあろうかと恐れているところである。

1. 太湖石資料

ここで、太湖石に関する明末清初(十七世紀頃)以前の代表的な資料名をあげておきたい。

まず、宋代(北宋(960-1127)／南宋(1127-1279))以前の資料索引としては、范成大(1126-1193)の『呉郡志』巻二十九が、また、宋代以降のものとしては、稲若水(1667-1717)等による『庶物類纂』石属巻六十六が有用である。そして、『呉郡志』ならびに『庶物類纂』に引用されている資料に、さらに、太湖石に関するその他の代表的な資料を併せ、人物名を優先して時代順に示せば、大方次の通りになる。

- 1) 唐(618-907)、白居易(772-846)の『太湖石記』(7-③; 7章の③参照という意味である。その箇所に訳文を示している。以下に同じ。)
- 2) 唐、白居易の『寄庾侍郎』
- 3) 唐、白居易の『雙石』(7-②)⁵⁾
- 4) 唐、白居易の『太湖石』
- 5) 唐、白居易の『太湖石』(白居易には太湖石と題する詩が二つある。)
- 6) 唐、白居易の『感舊石上字』
- 7) 唐、白居易の『楊六尚書留太湖石在洛下借置庭中因對舉杯寄贈絕句』
- 8) 唐、白居易の『牛相公宅太湖石(奉和思黯相公以李蘇州所寄太湖石奇狀絕倫因題二十韻見示兼呈夢得)』
- 9) 唐、白居易の『池上篇并序』
- 10) 唐、白居易の『池上作』
- 11) 唐、劉禹錫(772-842)の『和題姑蘇所寄太湖石兼寄李蘇州(和牛相公題姑蘇所寄太湖石兼寄李蘇州)』
- 12) 唐、牛僧孺(779-847)の『題太湖石詩序(李蘇州遺太湖石奇狀絕倫因題二十韻奉呈夢得樂天)』(7-④)
- 13) 唐、皮日休(833-883?)の『太湖石』
- 14) 唐、陸龜蒙(?-881)の『太湖石』
- 15) 唐、吳融(ca.890)の『太湖石歌』
- 16) 唐、盧言(?)の『廬氏雜說』(5-①)
- 17) 宋(960-1279)、陶穀(d. ca. 1000)の『清異錄』

* ヴェルツブルク大学中国学研究所

- 18) 宋, 胡宿 (996-1067) の『太湖石』
 19) 宋, 陳洙 (1013-1061) の『太湖石賦并序』
 20) 宋, 方勺 (1066-?) の『泊宅編』(6-⑥)
 21) 宋, 杜綰 (ca. 1130) の『雲林石譜』(②-①)⁶⁾
 22) 宋, 程俱 (1078-1144) の『太湖採石賦(採石賦)』
 23) 宋, 程大昌 (1123-1195) の『演繁露』(註-27: 註 27 参照。以下同じ。)
 24) 宋, 范成大 (1126-1193) の『吳郡志』(2-②, 6-⑤)
 25) 宋, 范成大的『太湖石志』(2-③, 3-①)
 26) 宋, 張端義 (1179-?) の『貴耳集』(6-⑪)
 27) 宋, 趙希鵠 (ca. 1240) の『洞天清祿(集)』(2-④)⁷⁾
 28) 宋, 張淏 (ca. 1180-1250) の『長嶽記』
 29) 宋, 韋居安 (ca. 1260) の『梅間詩話(梅澗詩話)』
 30) 宋, 周密 (1232-1308) の『癸辛雜識』(6-⑭)
 31) 『宋史』卷八十五 (6-①), 卷四百七十 (6-③)
 32) 宋, 常懋 (?) の『宣和石譜』(6-⑨)
 33) 宋, 蜀僧祖考 (?) の『宣和石譜』(6-⑧)
 34) 宋, 蜀僧祖秀 (?) の『華陽宮記事』(6-⑦)
 35) 宋, 張邦基 (?) の『墨莊漫錄』(6-④)
 36) 宋, 袁鑒 (?) の『楓窗小牘』(6-②)
 37) 撰者未詳の『漁陽公石譜』(4-③)
 38) 宋, 漁陽公 (?) の『漁陽石譜』(4-②)
 39) 宋(元), 陸友仁 (?) の『研北雜志』(註-22)
 40) 元 (1279-1367), 袁桷 (1267-1327) の『澄懷錄』
 41) 元, 胡助 (ca. 1330) の『秋堂湖石』
 42) 明 (1368-1661), 高啓 (1336-1374) の『太湖石』⁸⁾
 43) 明, 黃省曾 (1490-1554) の『吳風錄』(6-⑩)
 44) 明, 歸有光 (1506-1571) の『秦國公石記』
 45) 明, 朱國禎 (d. 1624) の『太湖石』
 46) 明, 陳繼儒 (1558-1639) の『太平清話』(註-24)
 47) 明, 謝肇淛 (ca. 1590) の『五雜俎』(2-⑤)⁹⁾
 48) 明, 林有麟 (ca. 1600) の『素園石譜』¹⁰⁾
 49) 明, 計成 (1582-?) の『園冶』(2-⑥)
 50) 明, 文震亨 (1583-1644) の『長物志』(2-⑦)
 51) 明, 張岱 (1597-1689) の『陶庵夢憶』¹¹⁾
 52) 明, 毛晉(鳳苞) の (1598-1659) の『海嶽志林』(4-①)
 53) 明, 曹昭 (?) の『格古要論』
 54) 明, 『大明一統志』
 55) 明, 『姑蘇志』
 56) 清 (1662-1911), 李漁 (1611-?) の『閒情偶寄』(4-④)¹²⁾
 57) 清, 姜紹書 (?) の『韻石齋筆談』(6-⑬)
 58) 清, 顧震濤 (?) の『吳門表隱』(6-⑫)
 59) 清, 『江南通志』
 60) 清, 『湖州府志』
 61) 清, 『吳縣志』

2. 太湖石とは如何なる石か

太湖石とは、太湖(江蘇, 浙江省)にわた

る湖で、あるいは、洞庭湖とも云われる) 周辺で採れる石灰岩で、現在、中国庭園を代表する庭石であることは、すでに周知の通りである(図1)。

ところで、太湖石には、大きく分けて、水中より採れるものと地上でとれるものの二種類がある。水中より採れるもののほうが、すぐれていて、石の表面に、窪みや穴が多い。この窪みや穴を、弾窩、あるいは弾子窩という。中国の造園技術書として知られる明の計成の『園冶』(2-⑥)によれば、太湖の洞庭西山の麓の消夏湾という入江でとれるものが、最もすぐれていたという(図2)。

一方、地上で採れるものは、旱石と呼ばれる。不思議な形をしてはいるが、乾燥していて光沢がない。しかしながら、太湖の洞庭西山の東麓に位置する鼇山よりは、なかなかすぐれたものが採れたようである(図2)。北宋(960-1126)の徽宗(r. 1100-1125)は、艮嶽という極めて大きな假山を、当時の都、開封(河南省)につくらせたことで有名だが、その時、ひとときわ際立った太湖石が、艮嶽へ向かう道の傍らに据えられたという。実は、その太湖石が鼇山で採られたものであったということが、『墨莊漫錄』(6-④)に記されている。なお、この艮嶽の太湖石に関しては、6章で詳しく検討する。

ところで、以下に再び検討するが、太湖石は、八世紀後半から九世紀前半頃より流行しはじめたようである。白居易の『太湖石記』(7-③)によれば、太湖石は、九世紀前半にはすでに献上品にもなっており、石上に文字を記すこともはじめられている。そして、十二世紀の艮嶽の造成は、太湖石大流行の引金になったようである。また、『吳郡志』(2-②)によれば、十二世紀ごろには、地上で採

図1) 太湖石図。(『素園石譜』巻二。)

図2) 『蘇州府志』太湖全図。中央やや下にある島が洞庭西山。その西部に消夏湾、その東部分に鼇山が見える。

れる太湖石に手を加えて、水中より採れる太湖石に似せることが始まっている。また、それは、なかなかの商売になっていたらしい。『洞天清禄集』（2-④、7-①）によれば、十三世紀までには、太湖石を黒く彩色する技術も登場していたようである。実は、これは、当時あるいは太湖石より愛好されていたとも考えられる靈璧石の偽物として売るための手段でもあったようである。

さて、太湖石とは如何なる石かを説いた文献は多いが、その中でも、最も明快なもので、かつ、最も古い資料に属するものとして先ずあげられるのが、宋の杜綰の『雲林石譜』の太湖石の説明である。実は、よく知られている『園冶』の太湖石の説明は、これをほぼそのまま引用したものに過ぎない。『園冶』（2-⑥）の説明は、消夏湾で採れる太湖石が一番すぐれていたということ、また、当時すでに採石過剰で、太湖石の数が少なくなってしまうということの二点を、『雲林石譜』の内容に加えただけのものである。ちなみに、『雲林石譜』によれば、太湖石とは大方次のような石である。

① 宋の杜綰の『雲林石譜』上巻。太湖石。

“平江府（今の江蘇省呉縣）の太湖石は、洞庭湖（すなわち太湖）の水中より採れる。太湖石は、堅くて（堅）、光沢があり（潤）、中空になっていて（嵌空）、穴が開いており（穿眼）、美しくて（宛転）、高くそびえ（嶮）、不思議な形（怪）をしている。色は、白いもの、青黒いもの、水色をしたものがある。筋目が縦横に走っており、皺が入込んでいて、まるで、彫刻したようである。石の表面には、全体的に、窪みや穴が多い。思うに、風や波に洗われてできたものだろう。この窪みや穴を、彈子窩という。叩くと、微かにひびく。採石する時、人は、鎚と鑿をもって、水中深くもぐる。かなり困難な作業である。石のよいものを見極めて切り取る。石の穴に大きな鋼を貫き通し、それを木の台を組み立てた大きな舟の上に、引き上げる。引き上げた石の中には、あまり良くないものが僅かにある。そんな時には、彫ったり、磨いたりして手を加える。そして、再び、水中に沈める。久しくすると、風や波に洗われて、石に自然に筋目が入ったように見えるようになる。最も高いもので、高さが三から五尺（約9.2-15.4m）ある。低いものでは、十数尺（15尺は約4.6m）をこえない。中には、一尺（約30.7cm）余りのものもある。ただ、欄のそばに立てたり、假山をつくったり、庭園（園林）や塀の内に置き並べたりするのがよい。甚だすぐれた眺めとなる。しかしながら、机の飾りになるような小さくてすぐれたものは、あまりない。”

尚、以下に、太湖石とは如何なる石かを説くその他の代表的な資料を時代順に紹介するが、その内容は、『雲林石譜』の内容とほぼ同様である。したがって、『雲林石譜』の内容を知っていれば、以下の資料は、ほとんど無視して構わないかもしれない。しかしながら、そういえるのは、それぞれの資料を、筆者は以下のように解釈したからである。

② 宋の范成大の『呉郡志』卷二十九。

“太湖石は、洞庭西山で採れる。水中より採れるものがすぐれている。太湖石は、長い年月、大波に洗われて、あまねく中空になっている（嵌空）。石の表面は、麗しく鮮やかで（鱗鱗）、くぼみができている。このようなくぼみを彈窩という。これも、波に洗われてできたものである。潜水夫が、綱を伝わって、水中に潜っていき、太湖石を穿ち採る。これは、極めて困難な作業である。太湖石は、温かく（温）、光沢があり（潤）、不思議な形をしている（奇巧）。叩くと、鐘磬（楽器の名）のように響く。唐代より愛好されている。山で採れるものを旱石という。これも、また、不思議な形をしている（奇巧）。しかしながら、枯れていて（枯）、光沢がない（不潤）ので、はなはだ貴重であるというわけではない。…近年、士大夫（官僚）たちで、石を愛好する者が多い。そのため、山に住んでいる者達が、旱石を彫刻して、向こうが透けて見える（玲瓏）ような穴をつくったり、石の表面を削って、彈窩に似せたくぼみや穴をつけるようになった。何も知らない者に売ると、高い値で売れることもあるようである。すぐれた形をしてはいないが、青白く玉のような材質で、石碑を作ったり、階段に用いたりするのによいものが、太湖中の鼇山（洞庭西山東麓）で採れる。光沢があつて清らかで（瑩潔）、ものが鏡のように映って見え（可鑑）、黄金や珠玉のように、堅くて（堅）、潤いがある（潤）。鼇山の太湖石も、（石碑や階段に用いられる石として）天下第一である。程俱が賦に記したのは、まさに、この石である。”

③ 宋の范成大の『太湖石志』（『説郛』弓九十六。）

“太湖石は、西洞庭で多く採れる。大波に洗われて、中空となり（嵌空）、潤いがあり（浸濯）、光り輝いている（光瑩）。なかには、珪瓊（酒器の名）のように黒い光沢があつたり（緝潤）、武器のように鋭かつたり（廉剌）、峰のように聳えていたり（矗）、屏風や障子のように連なっている（列）ものもある。また、油を塗ったように滑らかなもの（滑）、漆を塗ったように青黒いもの（黝）、人や獣や鳥のような形をしたものもある。愛好者は、これを集め

て、庭園（苑囿庭除）に飾っている。”

“太湖石は、水中より採れるものがすぐれている。長い年月、大波に洗われて、中空になっている（嵌空）。石の表面は、麗しく鮮やか（鱗鱗）で、くぼみができている。これを彈窩という。これもまた、波に洗われてできたものである。叩くと、磬（楽器の名）のように響く。”

④ 宋の趙希鵠の『洞天清禄集』怪石辯。

“太湖石は、平江（江蘇省呉縣）の太湖で採れる。土地の者が採っている太湖石には、大きなもので、高さが、一から二丈（約3.1-6.1m）あるものもある。まず、彫刻し、そして、急流の中にさらして、水に打たせる。久しくすると、自然にできたものようになる。煙でくすぶったり、色を付けたりすると、色は黒くなる。叩くと、微かに響く。假山を作るのによい。”

⑤ 明の謝肇淛の『五雜俎』卷三。

“洞庭西山で、太湖石が採れる。生地は黒く、白い筋目が入っている。高さは、八尺から一丈（約2.5mから3.1m）を超える。峯が聳え（峯巒）、穴が開いている（窟穴）。そのうえ、天然の趣があるので、（それを見ると）座ったままいろいろなところに行っているような気になる。その値段は、よいものは百金、悪いものでも十数金を下らない。園池中に、必ずあるべきものであるが、わが閩中（福建）では、特に得難い。思うに、山々に阻まれて、海運でなければ取り寄せられないからである。”

⑥ 明の計成の『園冶』卷三。五、選石。

太湖石。

“蘇州府の洞庭山の水辺で、太湖石は採れる。消夏湾で採れるものが、一番よい。太湖石は、堅くて（堅）、光沢があり（潤）、中空になっていて（嵌空）、穴が開いており（穿眼）、美しくて（宛転）、高くそびえ（嶮）、不思議な形（怪）をしている。色は、白いもの、青黒いもの、僅かに青黒いものがある。筋目が縦横に走っており、皺が入込んでいて、まるで彫刻したようである。石の表面には、全体的に、窪みや穴が多い。思うに、風や波に洗われてできたものだろう。この窪みや穴を、彈子窩という。叩くと、微かにひびく。採石する時、人は、鎚と鑿をもって、水中深くもぐる。石のよいものを見極めて切り取る。石の穴に大きな鋼を貫き通し、それを木の台を組み立てた大きな舟の上に、引き上げる。太湖石は、高く大きなものがすぐれている。思うに、軒や堂の前に立てたり、高い松の木や珍しい草木の下に置くとよい。假山を作ったり、庭園（園林）に並べ置いたりすれば、実にすぐれた眺めとなる。昔より今に至まで、採石すること久しいので、今では、ますます

す少なくなった。”

⑦ 明の文震亨の『長物志』巻三。品石、太湖石。

“太湖石は、水中より取れるものがすぐれている。長い間、大波に激しく洗われて、あまねく中空になり（空石）。各々の面は、穴が開いていて、向こうが透けて見える（玲瓏）。山で採れるものを旱石という。枯れていて（枯）、光沢がない（不潤）、そこで、彈窩（水中より採れる太湖石に見られるくぼみや穴）に似せたくぼみや穴をつける。久しくすれば、手を加えた跡は、まったくなくなり、美しく見える（雅観）。吳中（江蘇省呉縣）で流行している假山は、すべて、この石を用いている。また、太湖石の小さなものが、昔より、太湖の中に沈んでいる。漁師が、これを網にかけて採っている。靈璧石や英石にたいへんよく似ているが、太湖石は叩いてもあまり響かない。”

3. 太湖石の産地名勝

太湖石の特に有名な産地は、太湖中の洞庭西山と呼ばれる島である（図2）。その島の中でも、水中の採石場として消夏灣が、地上の採石場として鼇山が有名であったことは前章でも述べたところである。尚、最近の報告によれば、太湖石は国家の保護するところとなり、採石は許されなくなっているようである¹³⁾。

ところで、今で云えば太湖石名勝観光案内のようなものを、すでに宋代に范成大が『太湖石志』に記している。現在の状況を筆者は知らないが、当時有名な太湖石の名勝が偲ばれて興味深い。とにかく、太湖は単に庭石である太湖石の産地としてではなく、太湖石による自然の名勝としても有名だったのである。以下に、『太湖石志』の該当箇所を紹介する。尚、基本的には、太湖石の産地名勝は、洞庭西山にあったと理解しておけばよいようである。

① 宋の范成大的『太湖石志』（『説郛』巻九十六。）

“鼇山石。（鼇山は、洞庭西山の東麓に位置する。）この石は、堅くて、光沢がある。石碑や土台石や柱や礎に用いるとよい。一名、旱石という。『蘇州志』はいう。玉のように堅くて、光沢がある。これを叩くと響く。碑を彫るには、実にこれが一番よい石である。これを用いて階段を作るのもよい。世にまた稀なものである。

小洞庭。（洞庭西山の）龍山（龍頭山）の南にある。七十二の峰が聳えているように見える。綺里の東南五里（約2.8km）、圻村の山道に、水に臨んで、ひとつの石がある。青緑色をしていて、周囲は、二十餘歩（約

31m）ある。その上には、七十二の峰がある。よって、そう名付けられている。

雞距石。（洞庭西山の）山の麓にある。鳥が立ち止まっているかのように見える石である。

神鉦石。（洞庭西山の）林屋洞の中にある。鐘と鼓のように、叩くと、澄んで調子よく響く石である。

石板。（洞庭西山の）石公山の麓にある。平らで、人が数人座ることができる石である。

鷹頭石。縹緲峰（洞庭西山の最高峰）の頂上にある。鷹のように、荒々しく聳えている石である。

元龜石。霄漢嶺（不明）の南にある。龜のように見える石である。

石室。（洞庭西山の）龍頭山の近くにある。大きな洞穴で、家のように見える。

龍舌石。新安保（不明）の西にある。高く鋭く聳えた石である。

石壁。東洞庭（洞庭東山）の豊圻の南にある。屏風のように見える大きな石である。唐代に柳毅という人物が、木を三度叩いて案内者と呼び、そして、洞庭湖の龍宮にいったという話（李朝威の『柳毅伝』）の舞台がここである。

仙人石。（洞庭東山の）寒山の西岸にある。仙人が、足を投げ出したり、足を組んだりして座った跡のようなものが、はっきりとついた石である。

龍殻石。（洞庭西山の）鼇山の麓にある。水面から、よろめきながら現われているかのように見える石である。船頭は、行き来するに、この石に衝突しないように気を使っている。それゆえ、次のように云われている。東に龍殻石を、西に鼇山を見ながら、二つの舟を網で連ねて、その間をゆっくりと通り過ぎるのがよいと。

蟹殻石。（洞庭西山の）二鼇（鼇山と小鼇山）の南にある。龍殻石に似ているが、それよりも小さな石である。

龍牀石。（洞庭西山の）石公山の麓にある。寢床のように見える石である。伝えに云う。蛇のような石が、半分その姿を現している。また、向こうには、大龜の頭のような石が、ひそかに現われている。この二つの山（龍頭山と鼇山のことか）を見ながら舟を進めると下には、龍の寢床（龍牀石）が沈んでいると。”

4. 太湖石のどこがよかったか

太湖石を記した資料に当たると、大体において、堅い（堅）、光沢がある（潤）、中空になっている（嵌空）、穴が開いている（穿眼、巖岫）、向こうが透けて見える（玲瓏）、美しい（宛転、雅観）、高く聳えている（峻、峰

巒）、不思議な形をしている（怪、奇巧）等といった特徴が記されている。

では、そのどこがよかったのかは、次のような怪石の評価基準を記した文献の内容によって理解されよう。

例えば、清の李漁の『閒情偶寄』によれば、山石の美しさは、透（皴が縦横に走っている）、漏（穴が開いていて、向こうが透けて見える）、瘦（細く高く聳えている）の三字をもって表わされるという（4-④）。

また、次のような資料もある。

① 明の毛晉（鳳苞）の『海嶽志林』

“相石（石の選び方）。米南宮（怪石趣味で知られた米芾（1051-1107）は、瘦（細い）、秀（高く聳えている）、皴（皴が多いという意味か）、透（中空となり、向こうが透けて見えるという意味か）の四点をもって、石を選んだ。”

② 宋の漁陽公の『漁陽石譜』（『説郛』巻九十六。）

“元章（米芾）は、次の四点によって石を選んだ。秀。瘦。雅（上品である）。透。石の美しさを、すべて言いあててはいないが、大体その通りである。”

③ 撰者未詳の『漁陽公石譜』（『説郛』巻十六。）

“元章は、次の四点によって石を選んだ。秀。瘦（瘦の誤りか）。皴。透。石の美しさをすべて言いあててはいないが、だいたいその通りである。”

以上より、石の堅さや色、光沢などには、特別な好みは見出だせないが、その他の形状において、太湖石が、他の怪石より好みに適っていたということができよう。尚、その形状を如何に解釈したかに関しては、太湖石を主題に記した詩文の内容を検討しなければならぬだろう。この点に関して、7章で代表的な詩文として白居易の『雙石』と『太湖石記』、ならびに牛僧孺の『李蘇州遺太湖石奇絶倫因題二十韻奉呈夢得樂天』を訳出紹介するので、参照してほしい（7-②③④）。

また、太湖石は、蘇州を中心とする地域の産物である。蘇州は、中国の歴史上、経済文化の一大中心ともいえる都市である。したがって、蘇州文化の象徴としての太湖石の価値も見落としてはならないだろう。

さらには、北宋の徽宗の艮嶽造成以降、特に大型の太湖石が、富や権力の象徴ともなっていたらしい（6章を参照）。この点も太湖石が愛好された理由としてあげられよう。

尚、『閒情偶寄』は、中国における怪石評価基準に関して最も詳しく述べた資料であると考えられるので、その内容は、知っておく必要があろう。

④ 『閒情偶寄』巻九。山石第五。小山。

“山石の美しさは、透、漏、瘦の三字を

もって表わされる。(皺が,)ここがあらへと、あらがここへと走っていて、(まるで)道が通じているようなものを透という。石の表面に眼(のような穴)があって、それぞれの面から、向こうが透けて見えるのを漏という。空に向かって切り立ち、独り高く聳えていて寄り掛かるものがないのを瘦という。そして、透と瘦は、至るところにあってもかまわないが、漏の甚だしいのはよろしくない。もし、至るところに眼があれば、まるで、竈の中で焼きあげている焼き物に、僅かばかりの気に入らぬところが見つかったが、竈の中にあるので、もはやどうしようもないのに似た気持ちになる。ふさがっているかと思えば、通じてるように、たまたま、そこに眼があるようなものがよい。細くて小さな山を作るとすれば、常に、頂を広くして、麓を狭くする必要がある。根元の部分が大きかったら、たとえ美しい形をしていても、見るに足らない。石の眼は、円いのはよくない。もし、それが、自然にできたものであっても、脇に砕けた小石を貼りつけて、尖った角を持たせ、整った円にならないようにすべきである。”

5. 太湖石はいつ頃から流行したか

ここでは、太湖石の流行のはじまりについて少し詳しく見ておきたい。というのは、太湖石の発見者は、唐の白居易(772-846)、すなわち白樂天であると明言する研究者があるが、そうとは言い切れないのではなからうかと筆者は考えるからである。

太湖石という言葉を書いた文献資料として、明らかに、白居易以前に遡れるものは、現在のところ見当たらないようである。また、白居易には『雙石』(7-②)という詩があり、そこに「当時人は(その石を)嫌って取らなかった(時人嫌不取)」という句があるので、これを太湖石を総じて嫌って取らなかったと解釈し、白居易こそ太湖石の発見者であるとするのが、田治六郎の解釈である¹⁴⁾。尚、この解釈は、下山重丸により、『造園修景大

事典』にそのまま引かれている¹⁵⁾。

しかしながら、白居易こそ太湖石の発見者であるならば、白居易は中国文学の代表的な人物でもあるので、この点に因んだなんらかの話が中国に残っていてもよさそうはずだが、そのような話を記したものは、少なくとも1章に示すような太湖石に関する代表的な文献資料の中には見当たらない。したがって、白居易の『雙石』と題する詩にいう太湖石は、単に白居易が個人的に手に入れた二つの太湖石に関してのみ語っていると解釈したほうが適切ではなからうかと考えるのである。とにかく、太湖石の流行の始まりは、必ずしも明瞭ではないのである。

ところで、太湖石の流行のはじまりを記した文献資料をみるに、

- ・『吳郡志』(2-②)は、太湖石の流行は唐代(618-907)以降とする。
- ・『吳風録』(6-⑩)によれば、太湖石は、吳中(江蘇吳縣)においては、宋代に艮嶽という假山が造成されたころより流行しはじめ、明代までには、金持ちから貧乏人にまで広く流行していたという。
- ・『五雜俎』や『癸辛雜識』によれば、一般に石は宋の宣和年間(1119-1125)に艮嶽が造成されたころより重んじられるようになったという¹⁶⁾。

また、笑い話として、次のような話がある。

① 唐の盧言(?)の『盧氏雜説』(『佩文韻府』卷百上。太湖石。)

“ある高官が太湖石を買い入れるため將軍を浙西に派遣したところ、將軍より次のような手紙が届いたという。「ご希望の太湖石、虫食いだらけで、買うに堪えません。」”

これは、中空となったり、穴があいているところが多い太湖石の特徴が、唐代ではまだ必ずしも広くは知られていなかったことを示していると考えてよからう。

以上により、太湖石は、唐代特に白居易のころ、すなわち八世紀後半から九世紀前半頃より、太湖石という名称を以て知識人の間で流行しはじめ、宋の宣和(1119-1125)年間に艮嶽という假山が造成されて以降広く流行

するに至ったといえよう。

ついでだが、七世紀頃の代表的な離宮である九成宮の遺址に、太湖石が転がっているといったことを宋の蘇轍(1039-1112)が詩に記している¹⁷⁾。もし、これが事実を伝えるものであるとしたら、太湖石の流行の始まりをさらに一世紀ほど遡らせることが出来るわけであるが、惜しむらくは、その真偽のほどは分からない。

また、図3は、九世紀後半に唐の孫位(?)によって描かれた『七賢図』である。太湖石と思われる怪石が描かれている。これは、太湖石あるいは太湖石と思われる怪石を描いた画像資料として、最も古いものに属する。太湖石の流行の始まり当時は、あるいは、このように太湖石を幾つか庭園内に据え置く程度が普通であったのかもしれない。7章で詳しく述べるが、太湖石趣味で有名な白居易の庭園にも、太湖石は僅かに数個据えられていた程度であったようである。

6. 艮嶽の太湖石

中国における太湖石大流行のきっかけをもたらしたのが、宋の徽宗(r.1100-1125)による艮嶽の造成であったらしい。艮嶽とは、政和七年(1117)より首都の開封の上清寶籙宮の東に造られた周が十餘里(約5.5km)、最高峰の高さが九十歩(約138.2m)に及ぶ大規模な假山のことである¹⁸⁾。本来、公式には萬歲山とよばれたが、宣和四年(1122)に一通りの完成をみ、この時、宮城の艮(東北)に位置することから艮嶽と改められたとも云われている¹⁹⁾。艮嶽造成のため、江南地方から奇花異草をはじめ多くの太湖石が集められた。朱勔(1075-1126)という人物を指導者とするこれらの収集運搬に携わるもの達は、世に花石綱とよばれその横暴は人々に恐れられた。江南より開封におよぶ長距離の運搬は、太湖石を世に知らしめることにもなった。また、宣和五年(1123)には、太湖石の歴史上もっとも有名な太湖石が、洞庭西山東麓の龍山で朱勔によって採石され開封に運ばれ艮嶽に向かう道の傍らに据えられている。そこで、

図3) 孫位(9C後半)の『七賢図』。太湖石と思われる怪石が見られる。

太湖石流行の初期では、太湖石の庭園はこの程度のものであったのかもしれない。

ここでは、この太湖石に関して少し詳しく検討しておきたい。

まず、採石の時期に関しては、

- ・『宋史』巻八十五（6-①）や『楓窗小牘』（6-②）によれば、宣和五年に、採石したという。

大きさに関しては、

- ・『宋史』巻八十五（6-①）や『楓窗小牘』（6-②）によれば、高さならびに幅は数丈（五丈は約15.4m）という。
- ・『宋史』巻四百七十（6-③）には、高さ四丈（約12.3m）という。
- ・『墨莊漫錄』（6-④）では、高さは四丈、幅はその半分という。
- ・『華陽宮記事』（6-⑦）、蜀僧祖考の『宣和石譜』（6-⑧）、常懋の『宣和石譜』（6-⑨）は、高さが六仞（約12.9m）、幅が百圍（1圍を3寸とすれば、約11.1m）とする。

したがって、幅に関してはよく分からないが、高さは12m以上あったわけである。

採石の場所に関しては、

- ・『墨莊漫錄』（6-④）に、龍山であったことが記されている。

爵位に関しては、

- ・『吳郡志』などによると、この太湖石は盤固侯という諸侯の位を徽宗より授けられている（6-⑤⑥⑦⑧⑨）。

ところで、この太湖石はさらに徽宗より号を賜ったとされるが、その号に関しては資料により相違がある。筆者は、その号は神運昭功敷慶萬年（壽）であったのではなかろうかと考えているので、以下にその理由を整理しておきたい。号に関する資料を見るに、

- ・『宋史』巻八十五は、昭功敷慶神運石とする（6-①）。
- ・『楓窗小牘』は、敷慶神運石とする（6-②）。
- ・『宋史』巻四百七十は、神運昭功石とする。（6-③）。
- ・『墨莊漫錄』は、神運昭功敷慶萬年之峰とする（6-④）。
- ・『華陽宮記事』は、神運峰とする（6-⑦）。
- ・常懋の『宣和石譜』は、神運と昭功は、異なる太湖石の号であるとする（6-⑨）。
- ・蜀僧祖考の『宣和石譜』は、神運昭功と敷慶萬壽を、異なる太湖石の号とする（6-⑧）。
- ・『素園石譜』は、神運昭功と敷慶萬壽を、それぞれ異なる太湖石の号として、それぞれの想像図らしきものの図を付している（図4）。

さて、

- ・『墨莊漫錄』（6-④）は、神運昭功敷

図4)『素園石譜』巻四。宣和六十五石。神運明功。敷慶萬壽。

慶萬年之峰を、一つの太湖石とする。

- ・『吳郡志』（6-⑤）や『伯宅編』（6-⑥）によると、『宋史』巻八十五（6-①）、巻四百七十（6-③）や『楓窗小牘』（6-②）にいう太湖石は、明らかに一つの太湖石であると考えられる。

ということは、この太湖石の号は、神運昭功敷慶萬年（壽）であったのではなかろうか。つまり、それぞれの資料が、神運昭功敷慶萬年（壽）という号を略して記したと考えられまいか。石譜の類より、むしろ正史である『宋史』やその太湖石を直接目にしているの記録と考えられる『墨莊漫錄』にできるだけ基づくべきではなかろうか。したがって、『宣和石譜』や『素園石譜』にいうように、神運と昭功を、あるいは、神運昭功と敷慶萬壽を異なる太湖石とするのは、問題があろうと考えるのである。

ところで、盤固侯に封じられ、神運昭功敷慶萬年（壽）の号が授けられたらしい高さ四丈（約12.3m）のこの太湖石が、その後どうなったかに関しては、今となっては知る由もないようである。したがって、史上名高いこの太湖石を実際に目にすることは、もはやできない。しかしながら、艮嶽の造成のためにどのような太湖石が集められたかを示す実例が今でも残っているので、その姿を想像することができないわけでもない。現在、蘇州市第十中学にある瑞雲峰と呼ばれる太湖石が、その例である（図5）。その由来に関しては、『吳門表隱』（6-⑫）は、董郁陽（？）から、徐氏の所有に帰したとし、『韻石齋筆談』（6-⑬）は、もともと王陶（1020-1080）の別荘にあったのが、後に徐氏の所有に帰したとする²⁰。惜しむらくは、現在のところ、どちらが正しいかわからないようである。

また、艮嶽の太湖石を記す資料の内容から

図5)瑞雲峰。

考えて、艮嶽の太湖石が世の注目を浴びたのは、その美しさもさることながら、高さ四丈（約12.3m）というその大きさにも理由があったようである。おそらく、艮嶽が造成された当時では、高さ四丈もある太湖石を庭園に据えるということは信じがたいことであったのだろう。ところが、時を僅かに移すこと南宋（1127-1279）の時代、時の権力者たちが、艮嶽の太湖石に大きさにおいても負けないほどの太湖石を手に入れていたことが、『癸辛雜識』（6-⑭）により知られる。これは、大型の太湖石が富や権力の象徴となっていたことを示すものと考えてよからう。また、艮嶽の太湖石は後に史上から姿を消すが、これは、艮嶽の太湖石と同等あるいはそれ以上のもの

図6) 明の文嘉 (d. 1583) 等の『合作菓草山房図』。
太湖石と思われる怪石を用いた庭園を描いた代表的な作品である。

図7) 明の文征明 (16C.) の『真賞齋図』。
太湖石と思われる怪石を用いた庭園を描いた代表的な作品である。

が数多く登場したためでもあらうと考えられまいか。

ついでだが、艮嶽の造成のため数多くの太湖石が収集あるいは没収されたが、それを僅かに遡る建中靖國元年 (1101) にも、同じく徽宗の命により、江南地方に於いて大規模な太湖石収集が行なわれたことが、程俱の『(太湖) 採石賦』に記されている。それによれば、首都の開封の景靈西宮を造るために、太湖の包山 (洞庭西山) にて、太湖石四千六百を採石したという。

尚、以下に、艮嶽の太湖石に関する代表資料の内容を詳しく紹介しておきたい。

① 『宋史』卷八十五、志三十八、地理一。

“萬歲山艮嶽。政和七年 (1117)、上清寶籙宮の東に、萬歲山を造りはじめた。周が十餘里 (約 5.5km)、最高峰の高さが九十歩 (約 138.2m) あった。…宣和四年 (1122)、徽宗は、自ら『艮嶽記』を記した。山が宮城の艮の方角にあったので、艮嶽といった。…宣和五年 (1123)、朱勔は太湖で石を採った。高さ幅が、数丈 (5丈は約 15.4m) あった。大きな舟に乗せて、千人の人夫に引かせた。運河を開き、橋を断ち切り、堰を破り、城門を壊して、その石を運んだ。数か月かかって、やっと都に着いた。徽宗は、その石に、昭功敷慶神運石の号を賜った。この年、はじめて、燕の地を得た

(という縁起のよさに) 因んだのである。”

② 宋の袁褱の『楓窗小牘』巻上。

以上①の宣和五年の記録と同じ内容が見られる。ただし、昭功敷慶神運石は、敷慶神運石と記されている。

③ 『宋史』卷四百七十、列伝二百二十九、佞幸、朱勔。

“かつて、太湖石を得た。高さは、四丈 (約 12.3m) あった。大きな軍船に乗せて、数千人の人夫に引かせた。州や縣を通るに、水門や橋を壊し、城壁を崩し、その石を運んだ。そうして、都に至った。そして、その石は、神運昭功石の名を賜った。”

④ 宋の張邦基の『墨莊漫錄』巻二。

“宣和癸卯 (五年)、平江 (江蘇省呉縣) の朱勔は、太湖の鼇山で、太湖石をとった。高さ四丈 (約 12.3m) 餘り、幅はその半分の太湖石がひとつ採れた。鮮やかで、向こうが透けて見え、中空になっていて、穴がたくさん開いていた。彫刻してできるようなものではなかった。…二つの船をはじめて造った。八千緡という大金を費やして、その石は、都に運ばれた。多くの時を費やしたのに、運河が浅く、また、その石があまりに重かったので、船は前に進むことができなかった。そこで、先ず、その石を絵図に描いて報告した。徽宗皇帝は、その石に、神運昭功敷慶萬年之峰という名を賜る

旨を文章でお知らせになった。当時の人は、誰しもが、その石を目にした。私は、ある時、はじめて呉中 (江蘇省呉縣) に行ったおりにも、その石を目にしたものである。ところが、この秋、その石が、なんと今や、都に運ばれ、艮嶽に置かれているのである。”

⑤ 宋の范成大の『呉郡志』卷二十九。

“宣和五年、呉郡の人である朱勔は、大きな軍船を造り、ひとつの太湖石をのせて、都に運んだ。千人の人夫に担がせた。この日、人夫達は、それぞれ銀製の腕をいただいた。また、朱勔の四人の従者は、皆、官位を授けられ、旗印と黄金で飾った帯を賜った。朱勔は、ついに、威遠軍節度使となった。朱勔が運んだこの太湖石は、盤固侯の爵位を授けられた。

朱勔が誅せられると、他の小さな太湖石で、まだ献上されていなかったものが、呉郡の西の運河の両岸に残っていた。それらは、ことごとく、張循王の家の所有となった。”

⑥ 宋の方勺の『伯宅編』巻中。

以上⑤の前半と同じ内容が見られる。

⑦ 宋の蜀僧祖秀の『華陽宮記事』

“西に宮門を開いている。華陽宮へ入るための道は、馳道 (開封にあった皇帝専用道路) よりも広い。その道の左右には、大きな石があまねく林立している。全部で、

百餘株ある。それは、神運昭功敷慶萬壽峰と名付けられている。他と異なり、神運峰は、幅が百圍（1圍を3寸とすれば、約11.1m）、高さが六仞（約12.9m）ある。盤固侯の爵位を賜っている。道の途中に置かれている。石を集めて小さな建物（小亭）を造り、その庇の下に、神運峰はある。建物の高さは、五十尺（約15.4m）ある。”

⑧ 宋の蜀僧祖考の『宣和石譜』（『説郛』卷十六）

“神運昭功。敷慶萬壽。このふたつは、最もすぐれている。他と異なり、神運峰は、…”以下は、⑦の内容と同じ。

⑨ 宋の常懋の『宣和石譜』（『説郛』卷九十六）

“神運。昭功。このふたつは、最もすぐれている。他と異なり、神運峰は、…”以下は、⑦の内容と同じ。

⑩ 明の黃省曾『呉風録』巻一。

“朱勔は、花石綱をはじめ、天下に威厳を示した。太湖石一つで、多くの銀製の椀を得た。彼の従者は、官位を授けられ、また、黄金で造った帯を賜った。その石は、盤固侯に封ぜられた。そして、石を重ねて艮嶽が造られた。この時より今に至るまで、呉中（江蘇省呉縣）の富豪達は、競って太湖石を用いて、不思議な形をした峰や奥深い洞窟を造っている。多くの身分の高いものは、すばらしい太湖石を手に入れ、彫刻をほどこし、実に美しくしている。そして、珍しい花や木とともに、太湖石を用いて、すばらしい庭園（圃）を作っている。庶民や貧民に至っても、太湖石を用いて、僅かばかりの假山（盆島）をつくって飾りとしている。太湖石を集めることが、熱狂的になり、多くのお金が無駄に費やされている。朱勔の子孫が、虎丘（江蘇省呉縣の西北の山）の麓に住んでいる。今尚、造園業（種芸量山）を営み、王侯の家に仕えている。世に、花園子と呼ばれている。彼らのうちで貧しいものは、季節ごとに、花を背負い

やつて来て、呉の町のなかを売り歩いている。農業はあまりしていないのである。”

⑪ 宋の張端義の『貴耳集』巻中。

“石は、人のように話すことができるのである。…宣和年間に、艮嶽が造られた。朱勔が、太湖石を献上した。その中に、数千人をしても動かさないものがあった。徽宗皇帝は、思い計っておっしゃられたそうである。「この石は、官職と爵位を求めているにちがいない。」そこで、徽宗皇帝は、その石を大將軍に封じられた。そして、黄金で飾られた帯を賜われ、それをその石の上に置かせられたところ、石が動きだした。これも、石が人のように話した例である。”

⑫ 清の顧震濤の『呉門表隱』巻一。

“瑞雲峰、紫雲峰、観音峰の三つは、鮮やかで向こうが透けて見え、高く聳えている。宋代に、朱勔が採ったものである。後に、薰陽邸の所有となり、そして、徐氏の東園に移し置かれた。瑞雲峰は、乾隆四十四年（1779）に、織造府（官営織物工場）の西の行宮の内に移された。”

⑬ 清の姜紹書の『韻石齋筆談』巻上、瑞雲峰。

“震澤（太湖）の洞庭山の麓で、奇石が採れる。宣和年間に、朱勔は、龍山で、神運峰を採った。それは、幅が百圍、高さが六仞あった。中国の東南の人民を思わせ、汴京（開封）に運ばれ、艮嶽の第一の峰となった。今、姑蘇（蘇州）の徐氏の庭園にある瑞雲峰も、神運峰と肩を並べるほどのものである。峰が聳え（峯巒秀拔）、険しくで（巖崕）、中空となっていて（嵌空）、青々としていて光沢があり（蒼潤）、鋭くて（嶙峋）、樹林の中より抜きん出ているかのよう（聳立林表）である。はじめ、王文恪（王陶（1020—1080）の別荘にあった。後に、太僕（官名）であった徐君の所有となった。徐君は、呉門（蘇州）に隠棲のための邸を作ったとき、この石を移し置いた。船を連ねて、この石を乗せ運んだ。すぐに、

湖の真ん中に至ったが、その時、風と波が激しく、船は覆り、石は沈んでしまった。この時、波は冷たく遙かに広がり、月の光が水面に揺れていた。柔かい白絹のような雪が積もり、その上に、雲の影が映っていた。不気味な淵の底から、休むことなく波を湧き起こしていた大魚が、波の真ん中より飛び出して、清らかに骨のような大石になったかと思えるようなその石が、今、荒波打ち寄せる淵のどこにあるのか、誰にもわからなかった。人は、崖の上に立ち、水中を覗いたが、どうにもならなかった。徐君は、もとより、李德裕（787—849）のような怪石趣味があり、怪石をたくさん持っていたのだが、今は、どうしてもその石を失いたくなかった。漁師を広く集めて、広い湖の中、その石を探させた。まるで、海女が真珠を探っているかのようでもあり、また、船頭が、湖中に消えた剣を探しているかのようでもあった。突然、大波の中に、高く険しい影が現われたのを知った。ぼんやりとして、よくわからなかった。そこで、大きな筏を組み、起重機のようなものを作り、千人の人夫を使って、それを水辺に急いで引き上げさせた。大きな岩のように安定していた。が、求めていた石ではなかった。そして、よく見てみると、それは、求めていた石の台座だった。徐君は、その石が是非とも欲しくなった。それがため、様々な手段を、あまねく求めた、竜宮に冥摺（意味不明）し、漁師は、深い淵に再びもどり、その石を探した。谷を超え、巖を穿った。足の指がしばしば裂けてしまうほどの苦勞をした。そして、長い綱を使って、石を引き上げた。石は、大龜が、山を背負っているかのようにして、水面を横切った。それは、まさに、求めていた石だった。そこではじめて、運がよく、また、確かに何かの縁というものがあることを知った。瑞雲峰も台座も失われなかった。それらが、再びもとにもどったのは、偶然ではないの

図8) 明の項元汴（d. 1590）の『梵林圖』。
太湖石と思われる怪石を用いた庭園を描いた代表的な作品である。

である。”

⑭ 宋の周密の『癸辛雜識』前集、吳興園圖。

“沈尚書の南園。沈德和（沈介（ca. 1130））尚書の庭園は、南の城壁に沿って、百餘畝（約 56625m²）ほどの広さがあった。果樹がたいへん多く、特に、林檎が多かった。庭園の中には、聚芝堂、藏書室があり、聚芝堂の前には、十畝（約 5663m²）ほどの広さの大池が穿たれていた。池中には、小山があって、蓬萊と呼ばれていた。池の南には、三つの大きな太湖石が立てられていた。それぞれの高さは、数丈（5丈は約 15.4m）あり、高く聳え、光沢があり、陰しくて、当時有名だった。後に、賈師憲（賈似道（1213-1275））が、その石を得ようと、人夫を数百人集め、大木で大きな台を作り、大きな綱を掛け、城壁から吊り出し、並べた二艘の船に乗せて、谷や川を渡り、その石を紹興にあった彼の邸に運んだ。この時、およそ数人の人夫を失った。さらにその後、賈師憲が官職に破れた時、彼の家の色々な物が投売にかけられたが、その時、その石だけが、泥中に残った。たまたま、王子才が、その石に興味を持ち、役所に払い下げてくれるようにたのんだ。そして、彼は、職人を雇い、その石を（彼の邸に）移し置いた。しかし、彼は、その費用を支払わなかった。そのため、暫らくもたたないうちに、その石は、盗み売られたと非難するものがあつた。そこで、役所は、ほとんど半年もの間、彼を捕らえ留置した。この時、彼が支払った金額は、石の費用の十倍になった。その果てに、役所は、さらに、石を彼から取り上げて、もとの所へもどした。まさに、これは、石の崇りである。”

“韓氏園。南にある関所から、二里（約 1.1km）のところにある。かつては、平原郡王であつた韓侂胄（1151-1207）の一族のものであつたが、後に、我が家の所有となった。この庭園を、南郭隱、城南讀書堂、萬松関と名付けた。太湖石の三つの峯があり、それぞれ高さが、数十尺（50尺は約 15.4m）あつた。韓氏が全盛だつた時に、多くの人夫達を使つて、そこに移し置いたものであつた。”

7. 太湖石は如何に流行したか

さて、今まで紹介してきた資料の内容からでも、明らかであるが、太湖石が中国でたいへん人気があつた石であつたことには問題はない。この点は、さらに、例えば、次のような資料からも明らかである。

- ・『園冶』や『五雜俎』は、怪石の中で、太湖石を第一に取り上げている。
- ・『漁陽公石譜』によれば、中国の北方で

は太湖石が、南方では靈璧石が流行しているが、南北合わせれば、太湖石が一番であるという²⁰⁾。

・『研北雜志』も同様に、太湖石が一番で山石（おそらく靈璧石のこと）がその次であるとする²¹⁾。

・白居易は、『太湖石記』（7-③）で、太湖石が一番で、羅浮石と天竺石がその次であるとする。

・『華陽宮記事』は、北宋の徽宗の艮嶽の造成の記事として、太湖石、靈璧石を集めたことを記しているが、太湖石が先ず一番にあげられている²²⁾。

しかしながら、太湖石が、中国で最も愛好された石であつたとは言い切れないようである。というのは、次のような文献資料があるからである。

・『長物志』によれば、靈璧石が一番で、英石が二番であるとされ、太湖石は三番めにあげられている²³⁾。

・『洞天清祿集』は、八つの代表的な怪石をあげるが、一番が靈璧石で、太湖石は八番めである²⁴⁾。また、太湖石に色をつけて靈璧石の偽物をつくっていたという（7-①）。

・『雲林石譜』は、多くの怪石を紹介しているが、その一番めが靈璧石で、太湖石は四番めである。

・宋の張湊（ca. 1180-1250）の『艮嶽記』では、艮嶽造成の石として、靈璧石、太湖石といった記し方をしている²⁵⁾。

・宋の程大昌（1123-1195）の『演繁露』も、当時の怪石の流行を述べているが、靈璧石、太湖石といった記し方をしている²⁶⁾。

以上より、今日では、あまり知られていな

いようだが、太湖石に勝るとも劣らぬ石として、靈璧石という石があつたことが理解されよう。ということは、太湖石が今日のような庭園における絶対的な地位を持つようになったのは、比較的時代が浅いことであるのかもしれない。ちなみに、靈璧石とは次のような石である（図9、10）。

① 宋の趙希鵠の『洞天清祿集』怪石辯。

“靈璧石は、絳州（宿州（安徽省）の誤りか）の靈璧縣で採れる。この石は、山中の谷間に転がっているのではなく、地中深く掘ると、はじめて出てくる。漆のような色をしている。なかには、玉のように細

図9) 靈璧石。

図10) 靈璧石図。（『素園石譜』巻二。）

く白い筋目が入っているものもある。しかるに、峯のように聳えたところや、穴はない。よいものは、蓮の花のようであったり、横たわる牛のようであったり、どくろを巻いた龍のようであったりする。叩くと、黄金や珠玉のように澄んだよい調子に響く。よく切れる刃物で削っても、大方びくともしない。この石は、香を吸収する性質がある。書斎のなかに置けば、香の煙が、一日中石のまわりにかかって、散ることはない。峯のように聳えたところがあるものを選んではいけない。(偽物が多いからである。)偽物の多くは、太湖石に色を付けて作ったものである。思うに、太湖石も叩くと微かにではあるが、(靈璧石のように、)響く。

また、(靈璧石のように、)白い筋目が入っている。然るに、太湖石は、よく切れる刃物で削ると粉になってしまう(ので、区別できるのである。)

また、中国の至る所に、太湖石の庭園があったとはいいたいようである。次のような資料も見落としてはならないだろう。

- ・『園冶』は、『雲林石譜』を引きながら、中国のいたるところによい庭石があることを述べている²⁹⁾。実際、『雲林石譜』には、百十六種もの石が記されている。太湖石は、その四番めにあげられた石である。
- ・『五雜俎』によれば、福建では太湖石は入手し難いため、代わりに、地元の白沙溪というところの北方の山の上で取れる石が、よく用いられていたという³⁰⁾。
- ・明の陸深(1477-1544)の『春雨堂隨筆』によれば、武康縣の人々は、地元で産する武康石を用いて假山をつくっていたという³¹⁾。
- ・明の王世貞(1526-1590)の『遊金陵諸園記』の記す金陵(今の江蘇省南京)の庭園には、明確に太湖石を記すものではなく、むしろ、錦川石や武康石を用いた假山が記されている³¹⁾。
- ・『陶庵夢憶』には、山水画のような趣が

あるすぐれた螺山石の假山が記されている³²⁾。

以上により、太湖石が、実際に、中国全土に渡って、広く一般的に用いられていたとは言い切れないようである。さらには、

- ・宋の陸游(1125-1210)は、窓の前に小さな土の假山をつくったことを記している³³⁾。
- ・白居易は、終南山(長安の南にある山)を思わせる土の假山が知人の家にあったことを記している³⁴⁾。
- ・唐の杜甫(712-770)は、堂の前に、土の假山をつくったことを記している³⁵⁾。

以上を考えるに、今日、中国庭園の假山といえ、太湖石の假山が思い出されるが、かつては、必ずしもそうではなかったようである(図11)。ということは、あるいは、太湖石の実際の流行使用所有は、その大人気とは裏腹に、明末清初以前においては、特権階級や一部の熱狂的愛好者や特定の地域の人々に限られていたのかもしれない。

最後に、太湖石趣味で有名な白居易の庭園にも触れておきたい。というのは、今日に残り伝わる詩文から察するに、彼の時代、彼ほどの太湖石趣味をもっていた人物はそれほどいなかったと考えられるので、白居易の庭園を見れば、当時の太湖石の庭園が大方想像されると考えるからである。

先ず、邸宅の場所と広さに関しては、

- ・『池上篇并序』によれば、彼は、洛陽城内東南に位置する履道里の西北隅に広さ17畝(約9866㎡)の邸宅をもっていたという³⁶⁾。その三分の一が建物であったというから、残りの三分の二の多くが庭園として様々に利用されていたと考えてよからう。

持っていた太湖石の数に関しては、

- ・『旧唐書』に引く『池上篇』によれば、五個である³⁷⁾。
- ・『池上作』と題する師によれば、四個である³⁸⁾。

いずれにせよ、太湖石趣味で有名だったわ

りには、僅かに数個持っていたに過ぎなかったようである。

その太湖石の大きさに関しては、

- ・『太湖石』と題する詩に記された太湖石の高さは八九尺(約2.5-2.8m)である。
- ・『雙石』(7-②)と題する詩には、明らかに彼自身のものであると見させる二つの太湖石の特徴が記されているが、その高い方の高さでも、数尺(五尺は約1.6m)に過ぎない。

ということは、白居易の庭園は、あるいは、当時の一般的な庭園は、今日我々が理解しているような太湖石により複雑に構成された中国庭園とは異なる様式をもっていた可能性があるのではなからうか。

ところで、白居易は、太湖石を如何に解釈していたのであろうか。この点に関して、太湖石に関する白居易の代表的な作品で、彼が自ら所有した太湖石に関する『雙石』と題する詩、ならびに、当時太湖石の収集家として最も有名だった牛僧孺(779-847)の太湖石趣味を述べながら太湖石のすばらしさを記した『太湖石記』を、以下に訳出しておきたい。また、牛僧孺自信が太湖石を如何に解釈していたかを記す詩、すなわち牛僧孺が自ら太湖石を主題に記した詩もあるので、ここに併せて訳しておく。

② 唐の白居易の『雙石』(『全唐詩』巻四百四十四)

“青い二つの石がある。その形状は醜怪きわまる。普通では使いものにならないので、人々は嫌って採らなかった。天地が開けはじめた時できたもので、長い間水辺にうち捨てられていた。それが洞庭湖の入江で採れ、ある日突然私のものになったのである。郡の役所に運び込まれ、泥が洗い落とされた。煙の跡が厚くついているかのように穴は黒く、隙間には青い苔が厚く生えている。根元は年老いた龍がどくろを巻いているかのようで、頂は古びた剣のごとく尖っている。天上より落ちてきたものかと思え、この世のものとは思えない。そ

図11) 元の趙孟頫(1254-1322)の『百尺梧桐軒図』。
太湖石の庭園とは異なる趣を有する庭園が描かれている。

の一つは高く聳え、その高さは数尺（五尺は約1.6m）あり、私の琴を支えるのによい。もう一つは深く窪んでいて、一斗ほど入れられ、酒を貯えるによい。五絃の琴を左の石に寄せ掛け、杯を一つ右の石の上に置いた。窪んだ石の酒樽は酌めども尽きない。私はもうとつくに酔い潰れてしまった。人には皆好きなものがある。物もそれを持つにふさわしい人を求めている。私は歳をとり若者の仲間には入れてもらえなくなったことを漸く感じだした。そこで振り返って二つの石に問うてみた。私のような年寄りと一緒に居れるかどうか。石は何も答えることは出来ないけれど、私を友と認めてくれた。そして、二つの石と私は友となったのである。”

③ 唐の白居易の『太湖石記』（『唐文粹』卷七十一）

“昔の達人には皆愛好するものがあつた。玄晏先生（晋の皇甫謐）は書を、嵇康（晋の竹林の七賢人の一人）は琴を、靖節先生（晋の陶潜）は酒を愛好された。今、丞相（官名）であられる奇章公（唐の牛僧孺）は、石を愛好されている。石には文字がなく、音色がなく、匂いもなく、味もない。書、琴、酒とは異なるものである。それでも奇章公が石を愛好されているのはなぜだろうか。皆、これを不思議に思っているが、実は私だけがその理由を知っている。ある時、旧友である李生があることを約束した時に、「気に入らえれば、使いみちが多いものである（気に入らえれば、あとは理屈などないのである。）」といったことがある。まさにこれである。奇章公が石を愛好されている理由は、（ただ理屈なく）石が気に入ったからなのである。

奇章公は司徒（官名）になられ、河洛（黄河と洛水の流域の地）を治められている。邸をつくられたが、珍しいものを集められたりされていない。自らの仕事に専念され贅沢はされていない。ただ（洛陽）城の東方に邸を一つ建てられ、城の南方に別荘を一つ建てられているだけである。建物を上手に補修され、人を選んで付き合われている。他人にへつらわない性格で、常に無駄がすくない。くつろがれる時は、石を友にされている。石には多くの種類がある。太湖石が一番で、羅浮石と天竺石がその次である。今、奇章公が愛好されているのは、太湖石である。

以前、奇章公の部下に江湖地方を治める者が多かった。彼らは、奇章公がただひたすら太湖石を愛好されているばかりであることを知り、広く太湖石を探し集め、奇章公に献上したのである。四五年の間に太湖石はるいといと集まった。奇章公は、太湖石

にはもっぱら目がなかった。太湖石は邸と別荘に並べ置かれた。実に多くの太湖石が集められたものである。

その形は実に様々である。どこか不思議な小山か鮮やかな雲のように、渦を巻き捻れ高く聳えているようなものがある。仙人や道人のように、端正で厳格に聳えているようなものがある。珪瓚（酒器）のように、黒くて光沢があり尖っているものもある。武器のように、角が鋭く尖ったものもある。さらには、龍や鳳凰が伏したり動いたり飛んだり跳ねたりしているようなものもある。鬼や獣が歩いたり走ったり何かを掴んだり闘っていたりしているようなものもある。風が吹き荒れ雨に暗む夕べに、洞穴が開いて雲を吸ったり雷を吐いたりしているような高く聳えて恐ろしいものもある。霧が晴れて景色の麗しい夜明けに、切り立つ崖に雲がたなびき、山に立ち籠める蒸気が晴れて、美しい木々の緑が映えているような、のどかで親しみを感じさせるものもある。とにかく、朝に夕に太湖石を見るのだが、その様をいいあててはできないものである。一言でいえば、三山五嶽や数多くの洞窟や溪谷が小さくなって、その中に集まっているかのようなのである。極めて高い山が拳ぐらいに小さくなっており、一目で千里を見通すが、座ったままでできるような気にさせられる。それ故、太湖石を奇章公は気に入られたにちがいない。

いつも私は奇章公と共に、太湖石を近くでよく見ている。色々と考えてみるに、万物を創造した神が意識的に太湖石をつくったとは思えない。あるいは混沌としたものが固まって偶然に出来上がったのではなかろうか。そして、出来上がって以来幾千万年もの間に、太湖の入江にたまたたり太湖の底に沈んだりしたのであろう。高いものは数仞（五仞は約10.9m）ほどもあり、重いものは千鈞（約17.9t.）ほどもある。ひとたび世に出て以来、太湖石はたちまちに流行し、実にすぐれて珍しいさまが奇章公の目にとまり気に入られたのである。奇章公は太湖石を客や友人のようにもてなし、賢人や哲人に対するように親しみ、宝玉のように尊び、子や孫のように可愛がられておられる。奇章公が太湖石を求められたのか、あるいは太湖石が奇章公のところへ来るのを望んだのか、どちらかわからない。どちらか必ずわけがあるはずである。（思うに、きっとそのどちらともであろう。）

太湖石には大小（優劣）があり、甲乙丙丁の四つの等級に分けられる。それぞれの等級は、さらに上中下の三つに分けられる。奇章公の太湖石のそれぞれの裏面に、その等級を記したところ、甲の上、丙の中、乙

の下となった。

ああ、太湖石よ、何百何千年と経てば世に流れ所を変え、あるものは残りあるものは失われ、そして誰もおまえの存在に気づかなくなるだろう。後の世の私と同じ趣味を持つ人々に太湖石を見せ、この文章を読ませ、奇章公が太湖石を愛好されているわけを伝えたいものである。曾昌三年（843）五月丁丑の日に記す。”

④ 唐の牛僧孺の『李蘇州遺太湖石奇状絶倫因題二十韻奉呈夢得樂天』（『全唐詩』卷四百六十六）

“混沌としていたものが、何時固まって石になったのか分からない。中空になった石が今ここにある。高く伸上がったり低くうずくまっているさまは、あたかも龍と虎が闘っているようでもあり、また、ものが破れたようで常ならぬさまは、鬼神さえも驚くであろう。雨を帯びると清い水が溜り、軽く叩くと砕けた玉のように響く。矛先のように鋭く尖ったところがあり、また、糸が絡まったようなところもある。水辺でたいへん清らかに揺らぎ、松にもたれて静かに休んでいるようである。全身鱗に覆われているようでもあり、穴を通して洞天（仙境）がよく見えるようでもある。醜い瘤は、まるで顎の下の垂れ肉のようで、深い窪みは、水牛の角で作った杯のようでもある。雷や風がまさに起きようとしているかのようであり、辺りが薄暗くなっていくかのようでもある。ちと寒い朝に口をつぐんで震えているような大きな石が、いくつか横たわっている。地神さえもが心配しそうなくらい、崩れてしまいそうで不安定な感じがする。姑蘇（蘇州）の役人が珍重していたこの石には、可愛いような憎いような趣がある。大魚に襲われる危険をも顧みず、太湖の底よりこの石は採られた。そして、千里の道程をものともせず運ばれた。この石を、初めて池の辺に置いてみると、黄金や珠玉も色褪せてしまった。一目見たとき、不安な気持ちになったが、よく見てみて、ようやく安心した。すばらしい友人に出会ったようでもあり、また、旧友に会っているような気にもなった。楽しくなり、不思議な魔力を感じ、悩みは晴れ、二日酔いなど醒めてしまった。綺皓（秦から漢にかけて、山に隠れた四人の老人のうちの一人）のように俗人と交わらない趣があり、その様は、とりもおさず高貴な身分にあるもののようである。この庭園（園林）の寶ともいふべき太湖石について思い巡らし、よく理解する必要がある。詩の名人に劉禹錫と白居易とがいるが、彼らが、なんじ太湖石のために、しばしば詩を作ってくれることであろう。”

おわりに

太湖石は、太湖（江蘇、浙江両省にわたる湖で、洞庭湖とも呼ばれる）に産する石灰岩である。産地としては、洞庭西山と呼ばれる島の消夏湾と鼇山が特に有名である。唐代、特に白居易のころ、すなわち、八世紀後半から九世紀前半頃より、太湖石という名称を以て知識人の間で流行しはじめ、宋の宣和（1119-1125）年間に艮嶽という假山が造られたころより、広く流行するに至ったようである。太湖石は、その數の走り具合（透）、穴が開いていて向こうが透けて見えるところ（漏）、細く高く聳えているようなところ（瘦）が、特に、愛好されたようである。そして、太湖石が、中国の怪石趣味流行の牽引役を務めた名石であったことには問題はない。

しかしながら、中国には、太湖石の他にも、それぞれの土地に様々な名石があった。たとえば、靈璧石がその筆頭にあげられよう。また、土の假山の記録も見られる。さらには、太湖石趣味の代表ともいえる白居易の庭園も、太湖石が僅かに数個据えられた程度のものであったらしい。これらの点を考えるに、今日遺跡の残らない明末清初（十七世紀頃）以前における中国庭園は、今日の太湖石に代表されるような庭園遺構のみをもってしたところで、理解され得るものであるとは限らないようである。

では、太湖石は今日なぜ過剰にといってもよいほど、もてはやされているのだろうか。この点を明らかにするためには、清初以降の文献資料、ならびに、太湖石で知られる江南地方ばかりではなく、それ以外の地方の庭園の状況をさらに検討してみる必要があるだろう。

註：

- 1) 日本の造園史の研究者による太湖石に関する専論としては、次の論文がある程度である。
 - a) 田治六郎：「太湖石」、『造園雑誌』、11巻1号 1948 pp.16-20
次の文献は、タイトルは太湖石に関するものだが、実際は、中国の怪石趣味をまとめたものである。
 - b) 村松伸：「太湖石のフェティシズム」、『現代思潮』特集タオイズム 1991pp.84-101
次の写真集の太湖石の写真は有用である。
 - c) 吉河功：『中国江南の名園』、東京；グラフィック社 1990
- 2) 日本庭園における中国庭園の直接の影響を深く検討した専門の論文を、浅学のためかもしれないが、筆者はまったくしら

ない。

- 3) この点を指摘する論文として、次は注目に値する。

- a) 田中淡：「中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構」、『東方学報』第62冊、京都；京都大学人文科学研究所 1990 pp.125-164
また、十四世紀までの中国、韓国、日本の庭園の共通性を述べる次の論文も見落としてはなるまい。
- b) 鄭腫昨：「韓日伝統庭園様式の比較研究」、『韓国庭苑学会誌』第1巻第1号ソウル；韓国庭苑学会 1982 pp.41-62
- 4) 田中淡：「都市の中の理想郷」、『庭園と音楽』（朝日百科世界の歴史95）、東京：朝日新聞 1990 pp.E590-591
- 5) 白居易の詩に関しては次を参照。
（国訳漢文大成第9巻続文学部第2輯）白楽天詩集白楽天詩後集、東京；国民文庫刊行会 1941
- 6) 中田勇次郎：『中田勇次郎著作集』第9巻、東京；二玄社 1986 pp.229-238
- 7) 中田勇次郎：『中田勇次郎著作集』第8巻、東京；二玄社 1986 pp.69-129
- 8) 入谷仙介：『高啓』（中国詩人選集二集第十巻）、東京；岩波書店 1990 pp.81-86
- 9) 入矢義高（編）：『近世隨筆集』（中国古典文学大系55）、東京；平凡社 1971 pp.103-107
- 10) 中田勇次郎：6) pp.241-248
- 11) 松枝茂夫：『陶庵夢憶』（岩波文庫）、東京；岩波書店 1991
- 12) 中田勇次郎：6) pp.46-47
- 13) 吉河功：1-c) p.145
- 14) 田治六郎：1-a)
- 15) 『造園修景大事典』、京都；同朋舎出版 1980 巻5 pp.134-135 たいこせき
- 16) a) 『五雜俎』巻三：“至宋宣和時。朱勔童貫以花石娛人主意。…石自此重矣。”
b) 『癸辛雜識』前集。假山：“前世疊石爲山未見顯著者至宣和艮岳始興大役…”
- 17) 『子瞻喜雨亭北隋仁壽宮中怪石』（『樂城集』巻二）：“仁壽宮中穠穀生。太湖蒼石草間横。…”
- 18) 艮嶽に関しては、現在のところ以下の二つが最も詳しい論考のようである。
 - a) Kuhn, Dieter : Zur Entstehungsgeschichte des kaiserlichen Felsen-parks Genyue in der Hauptstadt Kaifeng am Vorabend des Untergangs der Nördlichen Song Dynastie, Heidelberg 1987
 - b) Hargett, James M : “Huizong’s Magic Marchmount : the Genyue

Pleasure Park of Kaifeng ” , in Monumenta Serica Vol.38 1988-1989 pp.1-48

- 19) 宣和四年（1122）に艮嶽が一通り完成したことは、次の資料によっても理解されよう。李質の『艮嶽賦』序：“宣和四年歲在壬寅夏五月朔艮嶽告成命小臣質恭請作古賦…”
- 20) 『陶庵夢憶』巻二。花石綱遺石。にも、瑞雲峰に関すると思われ記載がある点は、すでに田中3-a) p.147が指摘するところである。
- 21) 『漁陽公石譜』（『説郛』巻十六。）“たいてい、北方の人は太湖石を、南方の人は靈璧石を遠方よりの珍品として尊んでいる。もし、あわせれば、太湖石が第一で、山石（靈璧石）はその次である。”
- 22) 『研北雜誌』巻下。“鮮于伯機（鮮于樞（1259-1301）は、太湖石を第一とし、山石（靈璧石か）はその次といっている。”
思うに、鮮于樞は、元代の漁陽（現在の北京の東北）の人で、当時有名な美術の鑑定家である。あるいは、21)の『漁陽公石譜』の漁陽公とは彼のことかもしれない。
- 23) 『華陽宮記事』：“築岡阜高千餘仞。増以太湖靈璧之石。”
- 24) a) 『長物志』巻三。品石。“石といえ、靈璧石が一番で、英石がこれに次ぐ。しかるに、この二つの石は値段が極めて高く、買い入れるのが頗るむずかしい。”
思うに、靈璧石、英石、太湖石は、それぞれかなりの趣があった石であつたらしい。『呉郡志』や『太湖石志』で知られる范成大は、それぞれの名石を持っていたことが次の資料により知られる。
b) 『太平清話』“范石湖（范成大）の小峨嵋は靈璧石である。煙江疊嶂は太湖石である。天柱峯は英石である。皆彼の趣味に適っている。”
- 25) 『洞天清祿集』怪石辯。“怪石には、靈璧石、英石、道石、融石、川石、桂川石、邵石、太湖石などがあり、他にもたくさんある。”
- 26) 張淏の『艮嶽記』：“計會宦者以獻者。大率靈璧太湖諸石。”
- 27) 『演繁露』巻三。怪石。“『書経』禹貢によれば、青州の獻上品に鉛と松と怪石があつたという。この怪石は飾り物であり、獻上品としては不適當ではないかと考えている者がある。私が思うには、そのように解釈するのは間違っている。ここにいる怪（怪石の怪）とは、今愛好されている靈璧石や太湖石のように、中空になっていて、鮮やかに美しく、鑑賞するに足るものという意味ではない。形や光沢が

- 石に似てはいるが石ではないという意味で、怪というのである。怪は、異なるという意味なのである。”
- 28)『園冶』卷三。五選石。：“夫葺園圃假山。處處有好事。處處有石塊。但不得其人。…曾見宋杜綰石譜。何處無石。”
- 29)『五雜俎』卷三。：“閩中白沙溪北有溫泉焉。地名湯院。山上出石。…閩人園中常以此代太湖。”
- 30)『春雨堂隨筆』：“武康石。色黑而潤。文如波浪。人家園池疊假山。以此爲奇。”
- 31)『遊金陵諸園記』：“徐九宅園。…峰石皆錦川武康。”
- 32)『陶庵夢憶』卷一。金乳生草花。：“欄前以螺山石疊山披數摺。有畫意。”
- 33)『窗前作小土山栽蘭及玉簪最後得香百合併種之戲作』(『劍南詩稿』卷二十九。)
- 34)『累土山』(『全唐詩』卷四百三十八。和元八侍御升平新居四絕句。): “堆土漸高山意出。終南移入戶庭間。”
- 35)『天寶初南曹小司寇舅於我太夫人堂下累土爲山一匱…』(『全唐詩』卷二百二十四。)
- 36)『池上篇并序』(『全唐詩』卷四百六十一。): “都城風土水之勝。在東南偏。東南之勝。在履道里。里之勝在西北隅。西閉北垣第一第。即白氏叟樂天退老之地。地方十七畝。屋室三之一。水五之一。竹九之一。”
- 37)『旧唐書』卷百六十六に引く『池上篇』：“罷蘇州刺史時。得太湖石五。”
- 38)『池上作』(『全唐詩』卷四百五十三。): “太湖四石青岑岑。”
- 挿図出典：
1)『素園石譜』卷二。
2)『蘇州府志』太湖全圖。
- 3)孫位の『七賢図』／『中国美術全集』絵画編二，隋唐五代絵画，北京；新華書店 1984 図 31。
- 4)『素園石譜』卷四。宣和六十五石。神運明功。敷慶萬壽。
- 5)瑞雲峰／吉河功 1-c) p.127
- 6)文嘉等の『合作藥草山房図』／『中国古代書画図目』3，北京；新華書店 1990 p.119
- 7)文征明の『真賞齋図』／『中国古代書画図目』1，北京；新華書店 1986 p.35
- 8)項元汴の『梵林図』／『中国古代書画図目』7，北京；新華書店 1989 p.51
- 9)靈璧石／吉河功 1-c) p.127
- 10)『素園石譜』卷二。
- 11)趙孟頫の『百尺梧桐軒図』／『中国古代書画図目』2，北京；新華書店 1987 p.78 (1993.10.13 受付，1995. 1. 28 受理)

Summary : The strangely shaped rocks yielded from Lake Tai (Taihu 太湖) in the southern Chinese provinces of Jiangsu 江蘇 and Zhejiang 浙江 are regarded as one of the traditional elements characterizing Chinese gardens. Taihu rocks (jap. Taikoseki 太湖石) started to become popular among scholars during the late 8th to the early 9th century. In the beginning of the 12th century Taihu rocks met passionate acceptance not only from scholars, but also among the general people.

This paper argues that, however popular the Taihu rocks may have been from the 12th century onwards, it seems that they were still distributed in relatively small numbers. From extant records it seems obvious that they were only put up and displayed in the gardens of a few enthusiasts, some of whom had their residences near Lake Tai, and others being driven by a fanatical interest in this special type of rock to have it transported to distant places. Not surprisingly those who did get those rocks to their faraway homes had strong social power and connections.

The relative scarcity of Taihu rocks in contemporary records and other texts up to the 17th century proves that “traditional” Chinese gardens of that period may probably have looked completely different from what we imagine today.